

活動の中で学習を捉えるための理論枠組みの一検討(2)

Learning in Activity: A Framework for Understanding Learning (2)

三宅 芳雄[†]
Yoshio Miyake

[†]放送大学
The Open University of Japan
miyake.yoshio@gmail.com

Abstract

In this article I examine learning processes in activities of language use. Theoretical frameworks for understanding learning in human activities are discussed.

Keywords — learning in activity, language learning

1. はじめに

この小論は活動の中で、学びがどう位置づけられるのかを考察し、議論するめの一つのエッセイである。人の活動は全体としてみれば、無数の事象がその実現に関わっているという意味で、大変複雑である。それを捉える枠組みもまた決して一つだけではないだろう。ここでは、人の学びが活動のなかでどのように成立するのかを捉えるための枠組みの一端を提出し、議論の材料にしたい。

2. 問題にしている状況

以下は夏の日の夕方5時すぎの数分の間に、私の自宅の近くの小さな公園で成立した一つの情景である。これを一つの具体的な材料にして、活動と学びを捉えるための枠組みを検討する。今回はその中でも、最後の部分しか検討の対象にしないが、文脈を与え、当面問題にしている具体的な状況の理解にも役立つと考えられるので、全体を述べた。

私は、道を隔てた階段の上から、その公園の中に設置されている一つの遊具を見ていた。それは小さな木馬であるが、木で作られている部分はせいぜい座席のところぐらいだ。目立つのは1.5cmぐらいの太さの鉄棒からできたスプリングであり、それが座席を支えている。座席に連結して、自転車のハンドルのような持ち手がついていて、全体

が木馬になっている。その木馬は、もともと人が乗って揺らすもの、揺れるものとして作られているので、揺れるのは当然なのだが、誰も乗っていないのに、揺れ続けていて止まらない。風でゆれるのか、それとも直前に今はいない子供が乗っていたためにそのなごりで揺れているのか、まだゆれ続けている。どうしてゆれ続けるのか知りたくて近くで見ようとして公園の中に入ってゆき、木馬をしげしげと眺めていた。私が公園に入る直前に、その公園におばあさんと、その孫かひ孫の年中か年長組み(5, 6才)ぐらいの男の子が二人入ってきた。おばあさんは80才は超えていそうであった。おばあさんはベンチに腰をかけた。私が木馬を近くで見ている間に、おばあさんは、子供に向かって、「いい風が吹いているよ。」と言った。実際、公園には気持ちのよいそよ風が吹いていた。

(天気はくもりで、夕方ということもあり、気温も30度ぐらいで、そう高くはなかった。)子供とおばあさんの方を見ると、子供はおばあさんが使っていた、金属製の杖の真ん中を両手で掴んで回す遊びをはじめたが、回すことが難しく思ったのかすぐやめた。(こちらは、そんな難しいことができるのかと思ったり、おばあさんが制止するのかと思ったがそうはならなかった。)私は眺めるだけでなく、木馬に乗って確かめたかった。始めは、おばあさんと子供もいることだし躊躇していたが、とうとうちょっと腰掛けてみて、大きくゆれるのを確認した。私が帰路につきかけたところ、子供は公園にこれも設置してある水飲みについで水道の蛇口をあけて水遊びを始めた。私が公園を出ようとしたところ、子供が、「あったかい。あったかいよ」と弾んだ声で、言った。

3. 言語活動の成り立ち

この短い情景の中でも活動と学びの関係を検討するのに役立つ材料はたくさんあるが、今回は最後のところの子供の水遊びの活動に伴う、「あったかい。あったかいよ。」という発語の活動を取り上げる。この子供をここでは「太郎君」と呼んでおくことにしよう。

人の活動を引き起こすのに「思い」があれば、太郎君のどんな思いがこの発語の活動を引き起こすのに関わったのだろうか。その一つは身うちのおばあさんに、自分の発見を伝えたい、という思いだろう。太郎君にとって、冷たいと予期していた水が、お湯のように温かかったという事実は驚きや喜びをとまなう発見であっただろう。その発見が「あったかい。あったかいよ。」という発語の活動を引き起こすのは、その発見を身内であるお婆さんと共有するという結果を引き起こす活動だからだろう。発見を人と（特にここでは家族）共有することは喜びをもたらすこともあるだろうし、また、そうすることが、一つの自然な活動にもなっていく。発見を共有したいという意識的な思いが発話活動を引き起こすのではなく、発見を共有するための発話活動をほぼ自動的に引き起こす場合もあるだろう。

知ることの共有は発話活動がなくても実現できる場合がある。言語を使うことができない幼児でも、親をその場にひっぱって連れてきたり、指差したりする活動を通して、状況を共有することができる。しかし、知ることを仲間と共有することが人にとって大事だとすると、上記のような行為やしぐさなどだけで知の共有を実現することには多くの制約や困難が伴う。これに対して、言語という表象システムを使った発話活動は知の共有のためにそのための有効な道具となる。言語は人との間の知の共有を実現する活動の道具であり、そのような言語を道具として使う活動として、言葉を発するという活動が成立したのだと見ることができる。

4. 言語活動と学び

人の活動にはどうしたいという思い、つまり「意図」がある。その意図を実現するのにいくつもの道筋があるのが普通である。知の共有という人の

活動にもいくつもの道筋があると言ってもよい。このことが言葉の学びを容易にしていることについて検討してみよう。

言語という道具は人が生まれながらに持っているものではない。「あったかい」ということばは道具として子供がどこかで身につけたものだ。それは、大人や兄弟、友だちとの活動のなかで学ばれる。このことをまだたくさんの言葉を知らない幼児の太郎君が「あったかい」ということばを獲得した場面で検討してみよう。そこにも、いろいろな場面が考えられるが、ありそうな場面の一つは次のような場面だろう。太郎君が寒そうにしているとき、親がふとんをかけてしばらくして、「あったかくなった？」と聞いたら、「あたたかい」ということばを知らなくても、何を聞かれたかその場面の文脈で分かるだろう。状況の共有の活動は、「暖かい」という言葉がなくても別の道筋で成立する。母親のことばがよく聞こえなくて「XXX なった？」としか聞こえなくても、その場面、状況の中では暖かさが問題になっていることが分かり、母親との間で状況の共有が成立する。この活動の状況は言葉の学びを促進する。特定のことばという道具の働き、上記の場合は、その活動のなかで、言葉（単語）の意味と使い方が分かることになるからだ。別の場面で、太郎君が父親と一緒にお風呂に入ったときに、母親が父親に「お風呂、あったかくなってる？」と聞いた時にも、それを聞いた太郎君は母親がお湯の暖かさを問題にしていることが状況から分かり、「あったか」ということばが、暖かいということの意味していることを学ぶことができるだろう。状況を共有するための言語がどう働くのかが分かっていたら、その道具としての言葉の使い方が分かり、学べることになる。

5. 結語

このエッセイは議論の材料を提供することを意図したものであり、不完全なものである。裏付けのある主張を主な目的としている。議論の材料を提供することを意図したもので、なお、次のウェブページには今後の検討も加え、この小論の改訂版を掲載する予定である。

<http://miyakemind.com/yoshio/study/articles/jcsmeeting2015.html>